赤軍

No. 2

Ⅰ　分派斗争の今日的意義と世界戦争

Ⅱ　赤軍派同志への私の自己批判

＝現代革命に於ける党の自然成長性の克服
スターリン主義と「党ー軍事」＝

共産主義者同盟赤軍派

分派斗争の今日的意義と世界革命戦争

① キューバ革命に先駆的に表現され、ベトナム革命戦争―ラテンアメリカ革命戦争―中国文化大革命、そして68年世界を席捲した階級闘争の昂揚は、世界革命戦争を予感させ、その自然発生的条件の成熟を明らかにした。

② だが、その限界と一時的敗北は、この自然発生性の延長上に世界革命戦争が想定されないこと、そのためにはこの成熟した自然発生性そのものの止揚―プロレタリアートの主体の発展のために指導の転倒がおし進められなければならないことを明らかにした。

③ そのことは、現代過渡期世界の革命、即ち、世界革命戦争から世界プロ独・社会主義に至る革命の内容を暗示的に示している。即ちそれがプロレタリアートの主体そのものと変革を意識的に闘いとることから始まり、それがプロレタリアートを組織している全ての組織―国家・労働組合・政党・企業組織に対する闘争―政治革命へと連続的に転化し、そして物質的諸関係の革命―社会革命に到達し、意識―政治―社会革命の同時一体的遂行―文化革命として展開され、階級・国家の死滅―人類史の実現へと向っていくその連続性―質の展開としてあることである。

④ その出発点としてのプロレタリアートの主体の意識的な転倒の過程はまずもって「党」における分派闘争として始まり、分派闘争が、それ自身に媒介された先進的大衆の成熟した自然発生性の止揚の要求と結合して展開され、全ての政党を揺さぶり、プロレタリアートの深部に到っていくこと、かくてプロレタリアートが革命的政治闘争に動員されてゆくという構造をもっている。キューバ、中国、アジア、アメリカにおいて既に進行し、現に、日本、ヨーロッパで始まっている分派闘争は、こうして世界的同質性をもっており、それこそ世界党の形成過程に他ならない。その影響、或いは逆の表現は、各国の社会党、共産党の再編、ソ連の粛清の嵐として進んでいる。

⑤ この分派闘争は、不可避的に新たな革命党派を作り出さずにはおかない。そして生れ出る革命党派の現代的形態は革命の正規軍をつくり出し、それと共に存在し、成長する党という特徴をもっている。それは従って世界赤軍の形成過程でもあるのだ。こうして世界革命戦争の主体的条件が成熟し、最終的に革命戦争の戦略的確定へとゆきついていくのである。そして、それは又新たな論争の始まり、社会主義論争の始まりでもある。

⑥ 共産主義者同盟の分派闘争として始まり、全ての党派を把えずにはおかない日本の分派闘争も又この一環として存在する。それは既に昨年の10・21闘争が、68年世界階級闘争の同質性を内包した安保闘争として、国家の問題に蓬着した時以来始まっているのであり、以降大衆の自然発生的戦闘が党派を呑み込む程に迄成熟し、ブルジョア独裁の様々な形態に対して戦闘を推進してきたことによって増々促進され、秋の安保決戦が明らかに新しい時代の始まりとして意識されているが故に、その決着が問われているのである。

⑦ 従ってこの分派闘争の体質的問題は、共産主義者同盟の統一戦線党的体質を克服するところにあるのではない。それはまさしく結果を目的とする客観主義的思考である。問題は階級闘争の現段階―世界革命戦争への過渡―が成熟した自然発生性の止揚を要求している事、従って平和時から権力闘争と世界革命戦争に直面してゆく時期における階級闘争の自然発生的昂揚、これに全面的に依拠し、これを最も尖鋭に戦闘的に体現―牽引し、従ってそのような組織の型、機構、体質をもち、その克服をイデオロギー的にのみ追求してきた、極めてイデオロギー的戦闘組織、或いはその指導部として存在してきた共産主義者同盟の根底的止揚が要求されているのであり、かかる意味で新たな党が要求されているのである。従って分派闘争はどのような党へと至るのかをめぐって展開されているのであり分派そのものが生み出されているのであり、そうした意味で、再建―発展過程でもってきた。そして尚残してきた統一戦線党的体質は、新たな質へと転化しているのである。

⑧ この分派闘争は世界観―党の型―革命戦争の戦略をめぐって争われているのであり、秋の安保決戦―権力闘争をいかに開始するかをめぐって増々につまり、全党派へと波及せざるをえないものであり、そして、秋の闘争がかかるものとして展開される結果ひき起される階級闘争の構造的質的転換、全ての政党・戦闘組織・大衆組織の質的構造的再編成の中の革命党建設へと本格化していくのである。我々は今から直ちにそれを準備し、その原型の獲得に向けて前進していかねばならない。

2 党建設に於るスターリン主義と無政府主義と解党主義との闘争

① 我々のこの革命党建設のための主要な闘争対象は、スターリン主義と解党主義と無政府主義である。これらに現代過渡期世界に於て世界革命戦争への飛躍の過程で不可避的に産み落される傾向である。

② スターリン主義は現代過渡期世界をPrの歴史運動発展の段階、その矛盾の展開の独特な一時期として把えず、従って、それがPrの主体形成のための指導の転倒を世界革命戦争に向けて不可避的に要求することに無自覚であり、目的意識性と自然発生性との結合形態の危機の進行を除ベイし、レーニン型組織論の型態的把握と教条化のために、旧来の組織の型、機構体質の維持を絶対化し、党内闘争や先進的大衆の要求を積極的に組織するのではなくそれを官僚的に抑制し組織技術と組織処分で糊塗し、それを党の団結強化として恫喝する官僚的実権派として生み出される。この間の同盟中央―中闘派こそ、その典型に他ならない。

（主観的悪意や善意は別にして）

それは既に昨年の8回大会前から10／21―11／7で直面した問題・限界、それをいかに止揚するのかに対して、「階級関係論」によって「やれる範囲内でやろう」という堕落として始まったのであり、それが4／28闘争に対する指導放棄―中央指導の崩壊そして以降6月の二つのプロ通に代表される党内闘争への無自覚―官僚統制―組織処分へと一元化されるものとしてあったのである。革命論に於る客観主義とレーニン主義の教条化はその根処をなしていたのである。現代に於る革命建設は、このスターリン主義―官僚的実権派との必死の格闘を抜きにしてはありえない。

③ 解党主義は大衆Mの論理と要求をもって「党への飛躍」の問題にかえ、それだけに大衆の自然発生性の要求を代表してはいるが、その延長上に於る党建設論のために統一戦線党へと増々純化する傾向として現われている。それは、いわばこれ迄のBundの一面の純化であり、権力闘争時代には必らず登場する[illegible]（エスエル）左派的傾向である。我々はこれに対しては「党」として分離し、その上で大衆の高次な戦闘組織として対応しなくてはならない。

④ 無政府主義は我々の内部にはらんでいた危険性であった。分派闘争に於る赤軍派の形成過程が、先進的大衆の自然発生性の止揚の要求と結合し、そのことによって指導の転倒を獲得していくというものとしてあったが故に、党内闘争に新しい革命的息吹き―質をもち込みえたが、その内部に於る党建設が明確にされず、先進的大衆の爆発的力に獲得すべき質を与えることができなかったこと、そのためにその無政府的気運に妥協し、組織戦術のジグザグをもたらし、7／6とそれ以降の党建設の停滞を結果したのであった。それは、既に中国文化革命の中で、分派闘争と紅衛兵Mの関係としてあったものである。我々は、それを一方では赤軍へと組織することによって意識性と組織性を獲得させ、それからの党の分離と結合として党の独立性を保持し、その質を高め、他方では赤軍による大衆的戦闘組織の武装行動隊の新たな位置の獲得として、大衆との結合へと向わしめねばならない。そして、この型を革命の未来、世界Pr独から規定し、一貫した獲得目標として設定しなければならない。

3 我々の前進のために

(1) 現代過渡期世界論をめぐって

① 現在、現代過渡期世界論は、論争の主要な一つとなっている。中闘派・関西地方委、そして我々、更には中核・革マル・共労・ML、そして中国・キューバ等の論争はまさしく、これを出発点としていくであろう。

② この論争はその発展の中で1、世界Pr独・社会主義をめぐる論争、綱領―世界観をめぐる論争へと凝縮される。

2、階級闘争の質、Prの自然発生性の質、運動形態、党及び赤軍の型、ソビエ

トをめぐる論争へと至る。

3、現代帝国主義、労働者国家、諸政治勢力の根拠と性格等の分析を媒介に権力闘争と世界革命戦争の戦略と世界的統一戦線をめぐる論争、

4、今秋の闘争の戦術をめぐる論争へとにつまっていくであろうし、又そうでなければならない。

③　我々は世界観・綱領の領域の問題に対しては、それが単に抽象的理念や、理想として抽くことに対して反対し変革主体の現実性と、この変革主体そのものの変革に媒介された対象の変革―党の目的意識的実践として確定しなければならない。他方現代帝国主義分析や労働者国家の分析は、それが単に客体の客観的分析としてあるのではなくプロレタリアートの自然発生性の質、階級闘争の質、諸政治勢力の傾向とその存在根拠、そして目的意識的実践の任務と戦略的な運動―組織論を明らかにするものでなければならない。

④　今まで提出されている現代過渡期世界論は？それがプロレタリアートの歴史的運動の発展段階とその矛盾として展開されていず、プロレタリアートの自然発生性の質、階級闘争の質の規定が欠落され、従ってそれを止揚すべき現代の目的意識的実践と、それと自然発生性との結合形態―運動、組織論が全く明らかにされていない。

(2)　現代過渡期世界とプロレタリアートと党

①　現代過渡期世界の歴史的位置

(イ)　帝国主義段階から世界プロ独期への過渡としての現代過渡期世界

(ロ)　第一次帝国主義世界戦争～ロシア革命～第一次世界階級戦争の歴史的位置

②　19C後半期とマルクスの闘い

(イ)　資本論と近代プロレタリアートの措定

(ロ)　国家・市民社会とプロレタリアートとブルジョワジー

(ハ)　第一インターから第二インターへ。プロレタリア党のための闘争と前衛の位置

③　帝国主義段階とレーニン主義

(イ)　帝国主義とプロレタリアートの内的矛盾の展開

(ロ)　党とプロレタリアートなにをなすべきか～帝国主義論～国家と革命

(ハ)　飛び火論と同盟理論と弱い環論

④　第三インターとレーニン主義

(イ)　世界階級戦争の始まり

(ロ)　コミンテルンの世界政策と、ソビエトロシアの国家政策

(ハ)　世界革命の挫折と労働者国家とコミンテルンの変質

⑤　現代過渡期世界とプロレタリアート

(イ)　労働者国家と世界プロレタリアート

(ロ)　反革命同盟と世界ブルジョワジー

(ハ)　労働者国家と反革命同盟と帝国主義とプロレタリアート

(ニ)　現代帝国主義

(ホ)　現代過渡期社会

⑥　世界階級危機と党の目的意識的実践

(イ)　なし崩しファシズムとブルジョワジーの階級危機、帝国主義軍隊、社会排外主義、ファシズム運動

(ロ)　プロレタリアートの階級危機、後進国革命戦争、ソビエト形態、暴力闘争、スターリン主義、人民戦線

(ハ)　党の目的意識的実践と世界革命戦争～世界プロ独、

(ニ)　世界党、世界赤軍、世界ソビエト

(3)　赤軍建説をめぐって

①　共産主義者同盟中央指導部は「党の政治問題が党の軍事問題として根底的に問われる時代に入った」としきりに主張している。それ自身は全く正しい。だがそこから導かれる実践的結論は何なのか。彼らは「党が軍事機能を獲得する。」と結論付けている。これは決定的に誤った日和見主義的結論である。それではこれまでの「党」に一機能として軍事機能が加わるだけである。それはせいぜいこれまでの戦闘部隊に武器をエスカレートさせ戦術を高度化させるだけであろう。だがそれでは目的意識的な前段階蜂起をもって始まる権力闘争＝内戦の時代は闘えないだけでなく、その前にかかる部隊は崩壊してしまうであろう。

②　我々は軍事問題を機能としてではなく、組織論として把えねばならない。何故なら党の軍事問題は大衆の自衛武装の延長上に語られるものでもなく、又現代では帝国主義軍隊の崩壊～革命の軍隊への獲得ではなくとりわけ日本では自衛隊の特殊な性格上さし当って問題になりえないが故に革命軍は意識的に組織されねばならない。それはまさしく党の意識性によって組織され全ゆる戦闘部隊と質的に異って訓練された組織性をもたねばならない。

この軍の建設過程自身、党の運動の主要な域をなすものであり、又軍と大衆の戦闘組織との関係を経て党が大衆の自然発生性に身を委ねたり、のみ込まれたりすることなく媒介的に、従って普遍的に結合するのである。

③　指導の目的意識性は単に大衆の自然発生性に対置されるものでなく（それならば党は単なる意識になってしまう）指導の自然成長性に対置されるものであろう。その為には指導は自然発生性から独立したそれ自身の持続しえる運動形態をもたなくてはならない。それが党組織である。レーニンはそれをかつて全国政治新聞とし全国政治新聞を組織の組織者であり、集団的組織者であるとし、これを軸に党組織を形成した。だが今日ではそれだけでは全く不充分である。意識的主体的に権力闘争を切り開いていく攻撃型階級闘争の時代には、それに見あった環となる組織が形成されなくてはならない。

それが党によって直接して組織され指導される赤軍である。それは最も訓練された正規軍であり、党の大量の宣伝者であり組織者である。

④　他方赤軍建設運動を階級形成論から把えた場合どうであろうか。我々は既にこの間、世界プロレタリアートに向けた自然発生性が地区反戦という新たな全人民的政治闘争の機関をつくり出しあるいは全学連や地区反戦に媒介されて、個別闘争の領域からでもソビエト形態をもった。

そしてその意味で普遍的な大衆の闘争機関と、自衛武装が獲得されてきた（全共闘や労闘等）経験をもっている。そしてそのような闘争機関自身が今日既に質的転換を要求し始めている。だがそれは単に意識の注入によってのみではなく、何よりもそれをこえた。

それから独立した部隊とその戦闘によって媒介されなければならない。そして始めて権力闘争の最も意識的担い手として階級形成の最も高度な表現である。それこそ赤軍である。何故なら赤軍こそ最も高度に指導されうる組織的全体性、普遍性、世界性を純化して体現しているからである。

かかる意味でそれは既に類的存在を内包している。だからマ世界赤軍をめざす党直轄の軍なのである。だから我々は地区反戦や全共闘の中からも赤軍の部隊をつくり出し、そのことによってそれ自身の質をかえ、権力闘争の戦闘組織へと転化していかねばならない。

(4)　権力闘争の戦略と安保闘争の革命的戦術

安保闘争を日帝打倒―反革命同盟粉砕―世界革命戦争へといかに発展させるか。

①　佐藤帝国主義政府打倒のスローガンと内実

大衆にとって権力闘争を開始するスローガンであり、それは蜂起をもって始まる（ロシア2月シアー打倒の蜂起、ドイツ一日帝政打倒の反乱）そしてそれは意識的に開始されねばならない。

その内容は反革命突撃隊（機動隊）の粉砕であり、社会党、総評の分解、解体をひき起し、自民党の動揺をもたらすであろう。

他方、全共闘、地区反戦、官公労等での質的変化＝権力闘争の戦闘組織への転化、マッセンストはこの段階で市街戦して組織されねばならない。そして赤軍の大量的拡大、革命党の発展、地区軍団の急速な拡大を獲得しなければならない。

②　自衛隊、米軍、沖縄、米―極東―中国

行政諸機関の占拠、反共社会排外主義勢力、日共、人民ファンズムMの抬頭、対峙関係の継続と自衛隊の出動、沖縄米軍打倒闘争

世界革命戦線―米―日―中の統一戦線

③　米軍、ソ連の介入、ソ連軍、世界革命戦争の本格化。

・米大陸OLASゲリラ戦米国内戦米軍ソ連浸透

・極東日―沖―朝自衛隊米軍朝鮮―日本介入

・中国南亜―東南亜人民戦争米軍インドマレーシア拠点

・中近東米―ソ↔ゲリラアラブ連合浸透

・アフリカ

・欧州独軍―NATO軍↔仏・独の階級闘争支配

・東欧ワルシャワ条約軍

赤軍派同志への私の自己批判

＝現代革命に於ける党の自然成長性の克服スターリン主義と「党―軍事」＝

一九六九年七月十九日

坂本　均

NO1

△一▽歴史は常に矛盾に満ちたものである。ラジカルな闘いが、現実のありと全ゆる桎梏と制約を突き破り、未来への跳躍台を築きつつも、なおかつ、その革命的創造（の事業）を数々の欠陥―未熟性故の誤ちに於いて、歴史の制約に引き戻され、現実を把え切れず―結果的には玉砕し、敗北し、かくて革命的試みも空転し、一見無意味に思われる様な事態を呈することは多々あるものだ。いや、全ての革命的事業は、まずこの様な過程を不可避にかいくぐるところからはじめられるといっても過言ではない。

我々が闘いを開始し、今も闘っている位置はかかる性格のものと言えるだろう。かかる事態に於いて普遍と現実の歴史的自己―集団（創造―欠陥―試行錯誤）との間の深淵を看過することなく、かいまみつつ、生死の戦場にあって、放浪を続けることが革命家たらんとし、前衛党建設に目ざさんとする我々にとって唯一最低限の義務である。

NO2

かかる自己史に於ける義務が確認されてこそ我々自身の自己批判が成りたち、過去、如何に誤謬をつみ上げたものであれ、政治的、組織的実践が今すぐ開始されたからといって許されないことはないし、（それが例え肉体的死につながる全ゆる困難と制約が我々をおおうとも）又、種々な事情故、組織的活動から離れたものであれいつの日にか組織的実践を再開するのも許されるであろう。

△二▽　以上を踏えた上で私の同志達への自己批判の態度は、過去の要行的自己批判総括に入る前に先ずもって私自身の与えられた条件の中で、×月×日でもって始められた同志達の別党運動に対する思想的政治的態度について述べるところから始められねばならない

若し私が同志達と共にあったなら、×日以前では、私の赤軍派内での処遇はともあれ、私は最大限別党コースに反対しただろう。

（この理由は後述する）だが同志達の決意が固く私の力で遺憾ともしがたいならば、私は同志達と生死をともにしただろう。例えそれが誤謬の積みあげであり、政治・組織的にみて展望が暗く、地獄への道に連なるものであったとしても。

我々自身の革命と私の革命は、赤軍派の誕生とともにはじまり、その革命性と欠陥―試行錯誤―誤謬は、私自身のものであり、私の革命は赤軍派の同志を（例えそれが共産同内部であれ、外部であれ）除いてはないからです。その上で私は共産同に対して身をもっての自己批判活動に専念したでしょう。

NO3

だが私の×月×日以降は、私自身の、他の赤軍派指導部諸氏の現実の生身の自己矛盾―倒錯を観念的にしかくぐれない位置におかれている。この条件を踏まえた上で私の態度はこうである

赤軍派内一同志として（若し、その様な権利が与えられるなら）私は同志達の別党コースを認める。かつ私自身その最前線を引き受けたい気持ちである。だが過去の赤軍派の指導者の私としては、例えそれが今となって一つの理念であり、一道標で反古でしかないものではあれ、――別党コースに反対である。そして現在の赤軍派一同志としても、×／×を契機として独得な過程を通し、新たな分派闘争の段階に追いこんだ決定的責任が赤軍派の同志や共産同の同志に対しても、恐いは全世界プロレタリアート人民に対しても私に最大の責任があることを確認し、一切の自己批判の責任をとるものである

NO4

かかる別党問題に対してまわりくどい"中途半端"で矛盾に満ちた態度しかとれないこと自体、私が現実と拘われない、ただただ×／×以降の過去として継続する。①○○○○○の身としてある私自身の指導者としての現実的欠陥にあることを深く反省する。

△三▽　私の赤軍派諸同志への自己批判の基本点

A、④　②○○○○○○○○○に対しての全同志の意志一致抜きに独断的、スターリン主義的、ブルジョア戦争力学主義的志向に陥ちこみつつ③○○を加えた階級的道徳性のみならず我々の権力からの防衛の能力をこえて行った過渡性に対して

㋺　④○○を努力したにも拘らず権力に売り渡した私の指導能力について

㋩　共産同をして破防法攻撃と党内論争の積み上げの不充分さにも拘らず敵対的分裂の危機にさらしたこと。かつこれを通して赤軍派同志をして多大の危機にさらしたこと。

㋥　MD再結集と⑤○○○○○○への軍事的敗北―私を含む中枢指導部の補虜化に現われた軽率な判断と軍事指導上の未熟性、かつこれを通しての赤軍派の危機を促進せしめたこと。

NO5

総じて同盟中央を中心とする我々への右翼的スターリン主義的攻勢に対して左翼スターリン主義的、かつブルジョア戦争力学主義的組織対応への傾斜の不可避性を克服することへの組織指導上の未確定。B、㋑×／×以降、種々な外的、内的な理由はともあれ、かかる指導性の結果として赤軍派諸同志をして止むをえざる別党コースに追いこみつつ熾烈な同盟の自己批判―「分派」解体要求攻撃にさらしたこと。かつ、私自身の指導の未熟故、自己批判→党内闘争→党派闘争の路線（自己批判を契機として一定の赤軍派の組織解散を強いられることも含んで）に引き戻し切れなかったこと。

以上、④～㋥に要約付けられる私の赤軍派指導者としての自己批判を行なう。

△四▽　かかる党建設―党内闘争に於ける組織戦術上の自然成長的、左翼スターリン主義的、ブルジョア戦争力学主義的傾向となって現われた歴史的、政治的総括こそ赤軍派総体への私の拘り合い方に於いてなされねばならない。

NO6

①　6／8ASPAC闘争の試練を経て6／25赤軍派結成総会をもって我々は始めて党内分派としての実態を獲得した。6／25を結節点とする我々の階級形成―党形成の闘いは、6／28全逓新宿闘争―6／27明大記念館集会と誕生したその時点からして苛酷な闘いを要求された。我々にとってそれはもちろんのぞむところであったが。かかる闘いは我々の政治的、組織的闘いを急速に前進させたのであった。我々は㋑革命論（前段階蜂起―世界革命戦争、党―軍団―革命戦線）を基礎にロシア革命とレーニン主義―一国主義―受動性の残滓を克服し同時に過渡期世界観（自然史から真の人類史への過渡としての時代に於ける人間の位想転換を通じた真に自然や社会に対する革命的人間の成立）を確立しつつあった。

NO7

かつ、㋺記念館集会―全逓新宿闘争の敗北的総括を通じ、我々は革命論を組織実態にまで具体化しつつあった。革命戦争的性格への階級闘争の性格変化→党内闘争のそれに見合う戦術、党―軍団―革命戦線(1)実態的再編成（MDを中心とした集中的な政治集会への着手）とそしてこれらを貫徹する組織形態の再編成としての、ⓐ従来の臨戦的PB直轄の丸抱え方式からの民主集中、中央集権制への転換と文章を軸とするPB―中央人民軍事組織委―軍団長会議―細胞、Bと共青の区別と統一等、組織系列等の整備ⓑP、Bの長期政治計画の着手とその体制（P、B直轄の政治宣伝組織、事務局、親衛隊の形成）、統一戦線局の長期的日常的活動と多様な活動の整備。これらに支えられた臨戦体制としての中央人民軍事組織委の確立とその内的構成としての政治―軍事―兵端―組織―戦闘宣伝機能化と統一性の確保及びⓒ党内闘争に対しての同盟中央と中央派―⑦○○○○○の官僚統制―スターリン主義的対応に対する百花斉放―大衆繰り込み等、中国文革にみられる新たな党派闘争の様式確立への追求の努力㋑同盟員教育等々こそそれであった。即ち、我々は与えられた状況の中で世界観―革命論を基点にして、かかる革命を実現すべき手段としての無意識的にではあれ一個の党内分派として我々の前衛への変革と党建設に着手していたのであった。

NO8

最早、我々は過去の大衆運動に対するその革命化一般に限定され、革命論一般を観念的に対置する同盟内左翼反対派と異る主体的な前衛としてあり、かつ党建

設者であり、又その様に成長することを位置付けられていたのであった。

即ち、我々自身の前衛への成長と党内闘争過程での赤軍派自身の前衛的中核への成長を通じての共産同の党への成長の自然成長性を目的意識的に成長せしめる苦しい意識的闘いが全ゆる領域で要求されていたのであった。

③ かかる我々自身の前衛への成長と赤軍派の共産同の前衛的中核への成長の意識的促進は、階級闘争の革命化（狭い意味での）階級形成＝党としての闘い）の任務や、世界観＝革命論をもっての共産同への批判運動とは異なり、極めて主体的であり、我々自身の日々の批判的、政治的な反省と自己鍛磨を要求するのである。（狭い意味での党形成――党のための闘争）

NO9

普通、前衛の革命論――戦略論を導きの糸として労働者人民の政治革命を媒介とする世界プロ独への階級形成の促進は、常に前衛自身がプロレタリアートにそのように働きかけることを通じて、大なり、小なり、意識的にか無意識的にか前衛自身の変革と党建設（党形成）を不可避とし、交互媒介的、永続的、実践的関係にある。所わっておくが革マル派――黒田哲学に代表される前衛本質論――党建設論の如く、革命論＝戦略論の抜け落ちた、それ故、対象変革――自己変革の問かれた実践的交互媒介関係の欠落した党のための闘争――党独自活動（自覚の論理と学習会と他党派批判）を述べているのではない。革マル――黒田派は、階級形成論がなく、それ故、党の為の闘争も実はなく、有るのは宗教としての疎外の自覚→プロ人間の論理観念的措定運動だけであるのだが。

NO10

これ等、黒田観念論と本質的に唯物弁証法としての次元で相異し、戦略＝革命を実践的可能な軸にしつつも、狭い意味での階級形成（党としての闘い）に党形成＝党の為の闘いを解消する傾向を有していたものが旧BUNDであり、一時期の旧関西BUND――統一BUND、旧マル戦派及び共産同（第六回大会）であった。国際共産主義運動の領域ではマルクス＝ローザ＝トロッキーの組織論である。レーニンこそマルクスを止揚し、前衛と党建設の自然生長性の交互媒介過程を目的意識的に促進する「意識的党形成――党の為の闘争」を確立したのであった。「何をなすべきか」はそれ故決して大衆闘争の自然発生性に対する目的意識的指導にのみ限られて理解されてはならず、これとの闘い＝党の自然発生成長との闘いの総体として理解されねばならない。かかる戦略――革命論の措定の上での実践的前衛の措定と階級形成→党形成＝階級形成論の問題は客観的歴史観に於て藤本進治の「革命の哲学」のプロレタリアートの二重性の内的矛盾の自己展開の弁証的構造を踏えた上でこれを実践的主体から把え直したものに他ならない。

NO11

以上からして共産主義者＝前衛とは、戦略――革命論に於いて日々対象変革＝革命的実践活動を行なっている者をもって規定することは不充分であり、これのみにとどまらず階級形成→党形成→階級形成の一環としての党の自然成長性を克服する党の為の闘争を媒介にして総体としての階級形成を行なっているものを指さねばならぬだろう。正しい資本主義分析と「市民社会＝民家」論の確立を媒介に、よく敵→味方の相互の弁証法的関係を通して戦略――革命論（党＝先進的集団＝大衆、戦術 etc）は確立されるが、戦略――革命論の内包的外延的発展の性格とそこに内在するアイマイ性は、前衛と階級形成のアイマイ性を相互に制約しながら有する。逆論すれば、戦略――革命論の内包的、外延的発展性はその実践の持続性、即ち、党そのものの持続を「限定的」目標とした党の為の闘争を相互補完にして保証されるからでもある。

NO12

③ さて、私は戦略――革命論確立を前提にしての前衛の措定と措定された前衛自身の総体としての党としての闘いと党の為の闘いの原理的関係を明らかにしてきたが、ここでは簡単に前提とされた戦略――革命論の確立＝前衛措定の原点に至る先進的集団の前衛への転化過程を歴史的実践と論理の相互関係の中で主体的に設定してみよう。これは主体的即自的な革命的実践に媒介された対象的実践の総括＝戦略――革命論（自己変革的実践の総括でもある）と史的唯物論――経済学の連関関係を確定することである。我々はマルクス主義形成の歴史と論理との関係でこれを見てみよう。

NO13

我々が主体的実践者として党の為の闘争と党としての闘争＝階級形成論としてそれを導く実践的指針としての革命論を史的唯物論、経済学の内的連関関係として明示しなければならぬ領域に拘泥する意味は(イ)私と赤軍派の総括の原理的前提

であるばかりでなく、(ロ)旧ブントの六〇年安保の敗北とともに旧ブントの挫折――分裂に連なり、プロ通、革通――戦旗派に分化し、戦旗派の直感的に提起した前衛の措定→党の為の闘争と党としての闘争＝階級形成論→組織戦術の領域上の問題が、当の戦旗派自身が革通――プロ通派の小ブル急進主義的傾向との対抗化の余り、自己の直感的提起の意味を理解出来ず、その問題意識を革共同の「小ブル性の克服→プロ人間の論理」（黒田「ヘーゲルとマルクス」、及び「社会観の探究」「プロ人間の論理」「マルクス主義形成の論理」）に横流し、階級形成論を精算し、かつ政治組織上の問題を「現代に於ける平和と革命」「組織論序説」にすりかえた如く、未だ深く実践化されず、第七回大会に於けるマル戦派の自然成長的階級形成論を「上からの党――党の独自活動」として粉砕したにも拘らず、その後、それが希薄化し、10／21――11／7、東大闘争の限界の中で、再び「党の為の闘争――組織戦術」として深刻に総括されねばならなかったこと。

NO14

又その行過ぎの余りに誤解され、革マルイズムが旧戦旗派が陥った如く密輸入され招換主義的傾向を一時呈したことの為にも(ハ)この事は後述するが現代資本主義論を中軸としての過度期世界論――攻撃型世界同時革命＝世界革命戦争論に於て措定された。前衛の階級形成――党形成に於ける自然成長性の環がレーニン主義の党建設上に於ける教条化からのスターリン主義的官僚的党建設への転化とそのアンチとしての現実主義――主観主義の両面の無政府主義を生み落す危機を一般的傾向として、この二重性が現代革命に於て特異に党（軍事までを包摂した政治）と軍事の関係に媒介されて発現する事。政治戦略――革命論が軍事――戦略――戦術に振りまわされた軍に党が支配されたり、党が軍を直接に支配したりする自然成長性に現われる事。何故なら「党と軍事の関係」は階級闘争が革命戦争に転化し、党――人民が生死の境で武装することによってのみ勝ち抜ける性格に内在する。階級形成党形成の属性であるからだ。それはレーニン時代の階級闘争が党と民主主義を決定的階級形成＝党形成の岐路としてあったのに比するものである。

以上の事は、この自然成長性の克服の前提ともなるからである。実に×／×の時点に於て我々が陥ち込み始めたのは正にこの事態でもあったのだ。

NO15

それでは革命論と経済学、史的唯物論の内的連関関係をマルクスの先進的活動家から前衛の歴史的実践と論理的発展過程との関連で明らかにしてゆこう。

私が敢て、マルクスの「歴史的実践」と論理的発展と断る意味は、吾が黒田寛一によって「マルクス主義形成の論理」が正に実践を抜きにした思弁的追体験把握が語られ、実践を抜きに、マルクス主義が理解されるかの如き幻想を抱いているからである。急進市民主義者としての（ライン新聞時代＝ルソーイズム）としての実践と、他方でのヘーゲルをフォイエルバッハを通じて観念弁証法＝観念史観を克服しつつある初期第一時代を出発点にして、さらにこれを経て、森林伐採法問題から＝新ライン新聞時代＝四八年＝五一年の「仏の階級闘争」の時代までの実践は、獲得された唯物弁証法を基礎に永続革命論＝共産党宣言の革命論を形成し、他方、ユダヤ人問題→経哲草稿→D・I（ドイデ）に於て唯物史観＝革命論の基礎付け、「市民社会と国家」の理論）として終る初期マルクスの時代である。

NO16

この時代のマルクスは空想社会主義者の残滓を最終的に克服し、真の共産主義へ自己を止揚する過渡期への過渡である。何故ならすでにマルクスは実践的には四八年＝五一年の仏革命＝共産同の敗北の総括を通して「市民社会と国家の関係」を資本制分業論→労働疎外論一般として解明する事に限界を感じ、エンゲルスとの交り（「英労働者階級の状態」）、ブルードン主義との闘い等を通じて市民社会の科学的解明とブルジョア社会解体の革命論の科学的基礎付けとしてのマルクス主義経済学の確立に至るのである。これは六〇年代（経済学批判）を経て、資本論の完成と世界同時恐慌革命論→トルクス、エンゲルスの前衛としての確立→第一インターの創設へと至るのである。

NO17

ここで言えることは第一に革命的即自的実践を通して過去の観念的ブルジョア的価値判断を止揚しつつ革命論自体が発展止揚され、これを基礎付ける唯物弁証法も、内包的、外延的に発展し、史的唯物論に移行し、これも又、経済学へと移行していること、第二に、革命論は唯物弁証法→史的唯物論→経済学にそれぞれの独自性に構成付けられつつ、その移行を経ての最終的に経済学に於いて科学的に基礎付けられていること。第三に、以上からしてプロレタリアートとマルクス、

の「市民社会―国家」からの実践的現実的自己矛盾―意識に於ける自己疎外は経済学に基礎付けられ、革命論によるブルジョア社会の否定的実践の内に世界共産主義を展望し、解放的、科学的実践となるのである。（これらの理解は、広松渉「マルクス主義形成過程」、清水正徳「自己疎外から資本論へ」、田中吉六「主体的唯物論」、藤本進一「認識論」「革命の哲学」参照）

以上でもって先進的活動家が無数の経路をたどりつつも〈闘争方針〉の下に即事的・革命的実践を経つつ、ブルジョア的価値判断を止揚しつつ革命論を通してそれを基礎づける唯物弁証法→史的唯物論→経済学を総括し、前衛が指定される過程を論理的、歴史的に指定される。

そして革命論によって指定された前衛は、過去の先進的な集団＝（即自的なプロレタリア）ではなく革命論を通して対象変革と階級形成を同時一体に展開するばかりでなく、この前衛による交互媒介的指導を通して即自的プロレタリア（先進的集団）の存在と意識を転倒せしめ、（先進的集団の前衛に媒介された自己変革＝共産主義者へと止揚せしめること＝謂ゆる組織戦術）同時にかかる先進的集団への前衛の組織戦術を通した前衛自身の自然成長性を意識的なものにすること＝党の為の闘争、に於て実践的マルクス主義の開かれた世界観は完成されるのである。

要約すれば、㋑先進的集団の革命論らしきもの（闘争方針）を軸とする即自的実践と唯物弁証法→史的唯物論→経済学の交互媒介からの革命論による両者の総括とその措定による前衛の措定㋺指定された前衛による革命論を媒介とした主体的階級形成（狭い意味でのⒶ階級形成＝党としての闘争、組織戦術＝これがⒶと㋑の統一としてある、即ち、先進的集団のⒶ㋑の把え直しの行為、そして党自身の自然成長性の克服としての党の為の闘争。㋑㋺の二行程をもって前衛としての意識的階級形成論は指定されるのである。

このことは、藤本進治「革命の哲学」の内在性の歴史主義、客観主義化を主体的に前衛の側から把え直し実践的、組織化したものである。

「存在論―階級形成論」の高次な史的唯物論の領域は戦略―革命論に導かれた革命的実践をより意識的に実践化するところの「党としての闘争―組織戦術―党の為の闘争」の実践的組織論に結果し、開かれて結実するのである。又、このことに於いて階級形成―党形成の自然成長的交互媒介関係は意識的なものになるのである。

④ 旧BUNDのかかる「存在論―階級形成論」を踏えた実践的組織論への接近とその挫折からの戦旗派、プロ通派＝革通派は前者が革共同に黒田理論を媒介にのり移り、前衛主義に変質し、後者は吉本自立論や谷川土着論に媒介されつつ、独立SSL―独立BUNDを形成し、党の為の闘争、組織戦術の欠落した、或いは、これをせまい意味での階級形成論＝党としての闘争に解消することから濃厚な大衆M主義を刻印したのであった。後者の組織論はトロッキー・ローザ主義・吉村三郎論（先駆）、政治過程論・水沢階級形成論となって現われたのである。我々は後者の系譜、立場をとりつつ、過渡期世界論＝攻撃型世界同時革命＝世界革命戦争を確定し、「党としての闘争・組織戦術・党の為の闘争」を組織的に確立しつつあった。同時に現代過渡期世界―世界革命戦争に於ける特殊段階的な次元での自然成長性の克服に着手しつつあったのだ。

黒田哲学―組織論は形骸化したスターリン哲学の批判から人間の有機性、主体性を、存在と意識の連関を通して関連付けんとした。その限りに於いて「ヘーゲルとマルクス」「社会観の探究」は秀れた指摘を随所にみせているが、その方法論に於いて、分業史観の未確立故、「市民社会と国家」を通した存在そのものの社会との分裂、これを通した存在と意識の分裂（自己疎外が措定し切れず、それ故、対象変革を通した自己変革＝対象化が理解されず梯経済哲学を継承しつつ閉鎖された「資本制生産に於ける疎外の把みとり→「疎外の論理」→共産主義的人間のイディの対置と「プロ人間の論理」と完結するのである。

これでもって黒田哲学のエキスは終るのである。彼は50年前後帝国主義論への接近を志すが完全に挫折し、その挫折こそが「プロ人間の論理」に表現され挫折の降伏宣言こそが「宇野経済学批判序説」である。彼は宇野経済学を方法論的にも批判できず唯梯経済哲学の「疎外の把みとりの論理がない」と自己の立脚点の防衛に回るだけである。彼が宇野経済学を批判しえなかった根拠は宇野経済学そのものが50年代の小ブルの経済学（商品でない人間が、商品となるという疎外論）の質が、50年代の小ブル哲学と同質そのものであるからだ。（宇野経済学そのものについて、過渡期世界―現代資本主義論との関係で、別途詳述する。）結局彼は、対象＝自己認識＝経済学―革命論が獲得できず、「プロ人間の論理」で密度化するのである。この結果として過渡期世界の内的運動とその止揚の革命論

がわからず、過渡期「社会」をコミューン四原則の論理でなで切り、スターリン主義を「裏切り」で切りすて、過渡期世界総体に対して、裏切り疎外過渡期世界観＝（反帝反スタ論）＝「現代に於ける平・革」として捨象し正しい実践的組織論が確立されず「何を為すべきか」を接木し、「学習会他党派批判―小ブルイデオロギー滅却主義と観念弁証法の上でののりこえ」の宗教部落形成の組織論（組織論序説）に具体化せしめるのである。

戦旗派自身、プロ通・革通派の実践的組織論の未完成に対して、その弱点をつき実践的組織論に接近しようとしたが経済学―過渡期世界論―革命論の未確立故、プロ通・革通派組織論的欠陥を止揚できずその限界を黒田イズムにのりうつり過去の階級形成論の前進性を精算してしまうのである。（全世界を獲得する為にI」東大星野論文批判、森茂論文参照）プロ通派は「戦略―革命論―運動論」いわゆる「市民社会―国家」の領域）それ自身の域に於いて「武装」の問題を提示）それ自体、実践的総括上の正しさをもっていたが、それを支える経済学―過渡期世界論に於いて（姫岡「国家と財閥」全世界を獲得する為にII「政治局論文）方法論的に誤ち、破産し正しい組織論を指定し得ず、革通派と同様、党の為の闘争、組織戦術の欠落した階級形成論に止まったのであった。

革通派はプロ通派の如く、正しい「戦略―革命論―運動論」の直観を獲得し得ていなかったし、かつプロ通派と同様組織論的欠陥を保持していたにも拘ず「経済学の方法―現代資本主義論」に於いて（星野論文、東大意見書、全世界を獲得するためにII）それ自体正しい内容を提示し、革命論確立の基礎をもっていた。それ故旧BUNDの再建は、プロ通派の「革命論」―革通派「経済学―現代資本主義論」―戦旗派の「実践的組織論」が止揚・統一されねばならないのである。その後、プロ通革通派は革共同の観念論―宗教運動に対抗しつつ吉本―谷川等の自立―土着運動の指導理論に媒介されつつ自己の限界を止揚してきたのであった。

プロ通派は中大独立BUND・法・早・東等独立SSLと旧関西BUND（政治過程論）に代表され「市民社会と国家」の領域に於ける確立を通して「下から」の運動―組織論を深化せしめ、これは旧関四BUNDの「労働者政治組織論→第三期論」へと至るのである。

他方革通派はその決戦論に破産しつつも「宇野→鈴木→岩田」を通して「現代資本主義→戦略論」の深化をはかるのである。だが宇野経済学の小ブル性を明確に克服し得ず、かつ「国家論」の誤謬から「危機論主義―戦略主義」として常に限界をもつのである。（この典型が岩田経済学と水沢階級形成論のマル戦派である）吉本―谷川等は「現代資本主義過渡期世界論―国家論」確立の困難性及び実践的組織論の困難性を自覚し、反網領主義の立場をとり大衆の自立運動のなかから網領―革命論、経済学の確立をめざさんとした。

同盟第7回大会は旧マル戦派との党内闘争を明大闘争―ベトナム革命―OLAS―砂川―10／8＝11／12闘争の前進とその総括を通し、ほぼ過渡期世界論（現代資主義論―過渡期社会論、世界同時革命論、実践的組織論（階級形成論）の統一した問題意識を確立した。だがその後、かかる問題意識の統一性にも拘ず、同盟の革命的実践は、「ASPACと基地闘争」「中央権力闘争とマッセンスト」「蜂起とソヴィエト」「党と軍事」「党組織形態論」「党建設の自然成長性の克服」等をめぐって「過渡期世界論―革命論論―党組織論」の大難把性、不充分性、欠陥を露呈せざるを得なかったのである。我々は、過渡期世界論→革命論を確立し、党組織論を確立する過渡に、党内闘争―×／×を迎えたのであった。第7回大会―第8回大会そして現在に至る総括は別の機会に詳しく総括されねばならない。

ここでは同盟の政治的位置の基本点を確認しておこう。中大Sに代表される傾向は、叛旗―三上論文等にみられる如く、「市民社会―国家」の上部構造の分析―「下からの運動組織論」を原型に、現代資本主義→過渡期世界論→革命論、党組織論の確立に向かいつつある実践的存在である。中央派は、革通―戦旗傾向のブロックとして、過渡期世界論の未確立から、革命論がレーニンの教条化に落ち込み、戦旗的問題意識の鋭性レーニン党組織論の教条化からスターリニズへの変質の危機に遭遇している。

⑤ 早大支部を軸とし、日向同志に体現される良質の戦旗主義的傾向を立脚点とする前進へ若きポリシェヴィキ理論戦線NO7、8）は、革共同との対抗を通して、種々な内在的党建設上の問題提起を行なってきている。彼らの問題意識が前衛の指定と階級形成―党建設の自然成長性の克服にある以上その検討は、我々の現在の総括にとって極めて重要である。

(イ) 若ポリに見られる如く「ド・イデ」の解明を通じての「市民社会―国

家」に於ける「存在と社会の分裂」の根拠を資本制生産とその分業諸関係に求め、これをバネにして「革命の哲学」を主体的に、「何をなすべきか」に於いて把え直し、階級形成—党形成の自然成長性の意識的克服を「組織戦術として指定しているところにその前進をみなければならない。

(ロ) 彼らは黒寛の如く「資本制生産の主体的把み取り」で閉鎖し、対象化の論理を放棄することなく経済学→現代資本主義論→過渡期世界論→革命論として発展する可能性（上向分析）を充分残している。

(ハ) だが彼らの特殊な生い立ち（非主流派、早大という特殊な風土へ革共同—青解等の観念論的存在とその独特の党派闘争の熾烈性）からして革命論→前衛の指定を通して階級形成の一環としての党建設自然成長性の克服としての組織戦術、党の為の闘争が階級形成—党形成の為の方針—革命論上の実践が弱く「組織戦術—党の為の闘争」が立場主義や他党派批判主義に変質する可能性をも同時に内包していること。これが彼らが誤解される歴史的状況である。

(ニ) だが彼らは過渡期世界論—革命論においても優秀で吸収意欲を持っている。日向同志の理論戦線8号論文（革命方法論上の主体的立場の解明）は、過渡期世界論接近への方法の原則的整理—世界同時革命の指定において総体として正しい整理をしている。だが、これが遺憾ながら立場主義的傾向に終っている事は、資本論—帝国主義論—現代資本主義論として整理しても、そしてこれを起点にして、過渡期社会論の相対的独自な政治経済的解明を経ての過渡期世界の正しい措定方法を行ないつつも、かつその歴史的位置規定の正しさにも拘らず、なお悟性主義的で実践的戦略—革命論を引き出しきれず、彼の世界同時革命論が「資本主義社会→プロレタリア政治革命、非資本主義社会→補足的第二次政治革命—社会革命」（理論戦線NO8P13）がその意欲にも拘らず、平板な二つの革命の接木的事態に結果しているのは、その第一に彼の解明しようとした、危機論型現代資本主義とレーニン型帝国主義論の両者の内実が、解明され切れていない事、それ故に「現代市民社会と国家の実態」が解明しきれず、従って人間の位相転換を踏えた攻撃型世界革命の内実と内的連関性の理解が不充分に終る事によって、同時にレーニン主義と20年以降の戦略—革命論が体系的に整理、総括しきれていない事にある。この点に関しては「共産主義12号、仏論文」も同じ欠陥をもっている。

だからこそ我々は、日向同志に、現代資本主義—「なしくずしファシズム」の彼の言葉でいえば、帝国主義段階の現実形態を深め、革命論の深化を早急に要求するものである。かつレーニン主義、20年代以降の革命と革命論の総括を。

以上からして、彼等の党組織論（党としての闘争—組織戦術—党の為の闘争）完成途上にあり、なお迂余曲折するのである。

(ホ) 以上の歴史的、論理的前衛の指定の上での組織論総括を踏えた上での現代革命に於ける階級形成—党形成の自然成長性の克服の問題に移ろう。

我々が我々の党建設上の概観と過去の歴史的論理的組織上の総括を行なった理由は、これをふまえる事なしには、現代革命に於ける階級形成の一環としての党建設上の自然成長性克服の遅と、その技術は、明確に定めきれないからである。ただこの技術に関しては、我々は前述した如く、組織形態的にであれ現実に着手しつつあった。

我々は現代革命論の最終的完成として実践的目的意識的党組織論上の内在的環が第一にレーニン主義の教条化としての書記局政治を軸とするスターリン主義的官僚党内政治とその対抗としての党が軍事に引き回される無政府主義的政治（それが主観的な攻撃武装力であれ現実主義的な自衛武装力であるかはともあれ）との対抗的補完に前段階蜂起—世界革命戦争の初期にあり第二に世界革命戦争の過程に於いて「党と軍事」の問題に帰着することをまず指摘しておこう。レーニン主義のスターリン主義的党内政治への変質と、党が軍事組織される対抗的補完関係は、マルクスの組織論に騙されないまま、保守化されたメンシェビキ政治とその過渡性としての無政府的トロッキー・ローザの自然成長的党内政治に対して、初期レーニンの「何をなすべきか」前段階のマルクスの党内政治の新たな段階での止揚の芽をもちつつも陰謀家的・官僚的臭いを濃く保持していた対抗補完関係に対比できる。

その後、レーニンとボルシェビキは在外亡命PBによる革命的政治指導とロシアの中央委員の実践的「革命的社会民主々義M」との永続的分裂と止揚の過程にあった事に比する事ができるのである。

我々は幾度となく産業資本主義—帝国主義—現代資本主義に媒介された過渡期世界の指定とその連関を通してマルクス—レーニン—我々の革命論の第二次元を指定し、かつ前衛の指定の上に主体的、内助的階級形成—党形成の実践的組織論

としてマルクスによる前衛の指定と党形成抜きの無媒介的階級形成論、レーニンのマルクスの自然成長的階級形成論理意識的党形成論を媒介にしての階級形成論への止揚げそして我々のレーニンの受動的話級形成論の歴史的論理的限界を止揚した前段話蜂起—世界革命戦争を党い抜く能動的前衛の位相転換を通した世界的、革命的、軍事的力による帝国主義の世界侵略、抑圧、反革命を打ち破っての世界プロ独への否定を通した創造の階級形成としての実践的党組織論として指定しなければならぬことは確認されている。

前段階蜂起—世界革命戦争への突入を目前にして全世界のプロレタリア人民の高度な根底的危機を逃した位相転換を内的原動力にして、今過去の前進的先進的集団は、巨大な位相転換と世界的革命的軍事力保持の過渡にある。

この特殊な過渡は、全世界のプロレタリア人民は前段階蜂起—世界革命戦争という闘争を通し、世界革命戦線を団結形態にして、人民の一切の諸力を「民主主義的」諸力を、武装から世界赤軍に物質化していく過渡である。かつ、過去の先進的集団が、世界革命戦争と人民の武装を、党と党の武装集団＝RGの指導を受け入れ、それと結合しつつ指導し、党の媒介的荷い手として成長していく過程である。この先進的集団—人民の成長過程は、不可避の試行錯誤と混乱を引き起さざるを得ない。即ち、未だ経験した事のない生死の革命戦争に全市民社会の階級対立が引きこまれ、攻防の弁証法が戦争の論理に究極化され、政治が軍事に媒介されない限り無力なものとなり、かつ、軍事は政治によって生命力を与えられないかぎり創出し得ない相互の相矛盾し、補完しあった関係を経験を媒介に、普段に止揚していかねばならないのである。これらは革命戦争が呼び起す。

(ロ) 7／6以降熾烈な政治集会等「党」としての闘争と党内闘争—一時的分派闘争（ウ）の過程で赤里派同志諸民の私自身に主因を置く政治的組織的軍事的大打撃にも拘らず耐え抜き、闘いが拡大されていると聞いている。

＜I＞ そして、この中で7／6を集中点とする我々「赤軍派」の総括運動が真に展開され

① 大衆Mに指導に交互媒介される「党」自身の自然成長性の克服としての「党内生活の在り方」「党内の指導の在り方」等を通じ真に主体的な党建設論（党としての闘争—組織戦術—党の為闘争）が意志統一され

② それが特殊な武装闘争の過渡期に於いて、現代革命に於ける党の自然成長性の克服の問題がレーニン主義的党内政治のスターリン主義党内政治への変質に対する「党と軍事」に於ける自然発生性への拝跪の問題として本質的に総括されて

③ その実態的自己批判的総括の現実的表現としての指導部の自己批判—相互批判を通じた相互点検が革命的になされつつあること

④ かつ前段階蜂起—世界革命戦争の諸準備し「赤軍派」の新たな発展の内に展望確定と、及びそれをふまえた上での同盟及び全プロレタリアート人民への直接的独自的な自己批判の在り方とその実態確定が極めて深刻な形で討論されていること

⑤ にも拘らず7／6の事態を引き起した左翼スターリン主義的傾向—軍事力学主義的傾向の上に戦争論→党内他分派敵論が主張され7／6の我々の冒頭述べた行為と引き起した事実が合理化される傾向が残存し①②が本質的に総括されないまま、分派闘争既成事実化→同盟崩壊→別党建設論のプラグマティズム—自己保身—政治的不確信が一時期胎頭し克服されたこと等を聞いている。

⑤の問題は①②③の問題が歴史的・実態的に総括され抜けば基本的に止揚されるものであり、重要な政治組織総括は①②③を獲得し深め実践化することである。この点に関しては、四の項で私も私なりに総括したので参考し点検して欲しい。そして、以上をふまえた場合、実践的に我々の一切の革命性を表現し死活を制するのは④の我々赤軍派の組織展望を自己批判の在り方とその内実設定を、現状の同盟の政治状況をふまえた上で二つの組織的結論を統一して把え実際的にどうするかである。この問題をめぐって全同志の深刻で死活をかけた議論が恵まれない政治環境にも拘らず日夜続けられたと思う。

＜II＞ 我々「赤軍派」の7／6以降の状況での組織展望は、あくまで「前段階蜂起—「世界革命戦争」貫徹の路線の上にあるものであり、7／6の事態は、それに基本的には指導する副次的性格のものであったにも拘らず、我々自身の未熟さからの①②③の政治組織要因による犯罪的左翼スターリン主義的、軍事力学主義的組織対応から「味方」階級—人民内部の矛盾として処理されるべきものを処理しきれず、権力の介入を通じて結果的にではあれ、仏議長を売り渡し、敵対矛盾の性格に追いこんでしまい、かつ更にそれを契機に同盟を権力の破壊攻撃にさらし、党内闘争—党派闘争を敵対矛盾的性格に転化せしめたのである。その意味では、我々の主観はともあれ、結果的には我々自身が一時的ではあれ、敵権力の

同盟者に転化したのであった。

即ち味方階級内部の矛盾として自己批判要求↓○○○○として自己の権力から防衛し得る能力の範囲で処理し切れず、我々自身敵権力に結果的には加担したのである。その意味で自己批判要求⑨○○の暗度性及び、その仕方に於ける階級的道徳性での同盟とプロレタリアートへの自己批判の質とは根本的に異なる質の自己批判を要求されているのである。

この意味において、いったん敵権力のバリケードに入ったものが、味方のバリケードに復帰するには無条件の味方の制義を受け入れる自己批判の性格のものである。

即ち、肉体的政治的死まで受け入れる性格のものである。だがこの自己批判を赤軍派の指導部また指導部おしなべてが、全て等質に受けなければならないことは別問題であり、すぐれて、その責任指導部にある。勿論、赤軍派同志は、その責任の度合に応じて受けなければならぬことは自明であろうが。その階級的制裁を戦争による物理的敗北という、外的形式を通したものではあれ⑩○○○○○○○○は今受けつつある。以上からして、我々「赤軍派」の組織展望確立と7／6の事態に対する自己批判は極めて困難で複雑である。

＜Ⅲ＞　原則的な問題の立て方はこうである。

①　同盟に対して、合法—非合法はともあれ、赤軍派を解体せず（組織的、物理的に解体されることは一時的にはあるが）前段階蜂起—世界革命戦争に向け諸準備を持続することを、即ち、直接的か迂回的かはともあれ、分派闘争（別党コースになる）コースであること。

⑪○○に関する自己批判を内在的に全赤軍派同志が内在的実態的に受けとめつつも政治的、肉体的死に到るところの自己批判は旧指導部に階られる様に努力すること。かつ新指導部を形成し団結を崩さないこと。

③　この上で、我々赤軍派の主体的状況、現在の同盟が内状況—短期長期的党派関係—権力関係等々の総合判断の上、直接的別党コースか党内復帰↓党内闘争↓党派闘争↓別党コースを満足することであった。

不可避の矛盾である人民が武機をもつことによって、その使い方を無政府的に行ったら（攻撃的か防衛的かはともあれ）唯武器主義に陥ちこんだ!!　前衛党の政治指導を拒否したり、或いはその失敗から武器を放棄し、政治一般に回帰したりする事態こそ正にかかる事態である。

先ずこれら先進的軍団—大衆の混乱、試行錯誤等の自然成長論は古い党に持ちこまれた党自身の自然成長性の問題が自らの政治と自らが獲得した軍団と武器とその連関、後者の前者の扱い方として、即ち「党と軍事」の問題に媒介されて現われるのである。

この事は、帝国主義段階の到来と共にブルジョア民主々義（議会—労働組合）が階級闘争の次元深化を通じ上から与えられ下から奪ち取られていったのに対して先進的集団—大衆が、議会と労働組合へのかかわり合い、使い方に混乱し、党自身が労働組合を媒介とした闘争、議会を媒介とした闘争に巨大な混乱を昱したのに同軫な事柄であり、この事が、今や階級闘争を通じて世界革命戦争と世界的軍事に止揚し発展されたことを意味するのである。

過渡期世界論—革命論（前段階蜂起—世界革命戦争、党—軍団—世界革命戦線）の未確定の上に武装闘争が要求されていないことが付加された場合、一層普通一般に古い党の内部政治にあっては、古い型の政治家と古い型の革命軍人との対立、これらに対する新しい型の政治家と新しい型の革命軍人との対立等々の様々な組合せの対立が自然成長的に形成され、かつ武装闘争への飛躍のちゅうちょな武装闘争↓「党と軍事」の問題に応え切れず、レーニン主義教条化とレーニン党内政治の変質としてのスターリニスト政治へと変質し、これに応えんとするものと下からか、上からか或いは現実主義的か主観主義的かともあれ、前者の対抗上未だ未熟な実践的戦争と自らが保持した軍事力によって引き回され排撃し、無政府主義的な唯武器的—ブルジョア戦争力学的政治に転落するのである。

かかる党内闘争—党派闘争の在り方こそ特異な過渡期に於いて普遍的で世界史的現代的であるのだ。これらの悪矛盾的一対——対応を止揚する方向は、まず第一に、かかる武装闘争への特異な過渡に対して、党自身の自然成長性は、スターリン主義と「党と軍事」としてあり、党内闘争の性格がかくあることを理解することである。第一に、後者自身が軍事を政治の下に統轄する党内機構（党—中央人民軍事組織委—S—軍団—武装蜂起準備委の指導—被指導の経路を意識的に確立することであり、第三に、百花斉放—大衆繰り込み路線をもって、党全体の枯渇性を克服し、活生化せしめることである。力学主義—唯武器的傾向を克服する必要であったのだ。

だが、我々は過渡期世界論—革命論を確立し基本的な目的意識的党建設論（党としての闘争—組織戦術—党のための闘争）を組織的に確立しつつあいながらも武装闘争の特異な過渡期における党内闘争の自然成長的性格及び、軍団と武器をもった新たな政治をめざした組織故に「党と軍事」に媒介される新たな自然発生性に対して意識的たいえなかったのである。

このことは、我々が赤軍派指導部が大なり小なり政治過程論によって誕生し、前述⑨⑧④⑤章によって総括した如く、対象分析—戦略—革命的実践に通じながらも、にも拘わらず、「戦略—革命論」の唯物弁証法↓史的唯物論↓経済学を通しての主体的把握が希薄で、かつ、それと一体に大衆Mの指導における「意識性」をもちつつも、それと交互媒介にある前衛自身の主体的自然成長性の克服としてある党内生活に於ける指導と被指導の意識性の希薄性＝主体的党建設論の希薄性—未確立としてある存在であったこと、かつ指導部自身が指導部自身の矛盾を赤軍派同志にはかり、若い同志を鍛え、カードルに育てることを通じ、自らをも鍛え、他方全同志自身も又、指導部に対して自己の矛盾を提起し、指導部を鍛え自らも鍛えてゆくところの「自己批判—相互批判の党内政治生活の在り方が未定形であったこと、例えばFM問題、全逓新宿闘争の戦術設定のジグザグ等）関連し、機能主義的に増幅され、独断—専制し、増幅されていったのである。

私は、以上を総括した上で今後普遍的で共通な、それ故、何度も起こるところのかかる党建設の自然成長性に対して「党—軍事」の問題を深め、これを実践的なものとすると同時に実践的戦争論を確立しなければならぬ課題を急務として抱えていることを自覚する。

我々は現代革命に於ける党建設の自然生長性が「党と軍事」に媒介されて現われることを深く自覚しこの永続的矛盾の止揚の実践的在り方を獲得しなければならぬ。

同志達は、直接的別党コースを選択し、私は18日以前迄は、迂回的別党コースが可能であると結論した。この政治判断については種々な判断する置かれた環境等が作用したものと思う。

我々は少くとも事態発生の外的内的根本的原因、主体的総括軸点、基本的別党コース、自己批判の質とその在り方、実態に関して基本的しっかりした一致点を有している。

だが私は直接的別党コースが私の判断ではより困難の様であるが（短い射程では、正しい道だと今でも思っているが、同志達が決断した以上私は冒頭に述べた態度を堅持するつもりである。

我々は⑫○○○○○○○○○○○○可能な限り主体的自己総括と自己批判活動をやっており、出来うるならば、実態的自己批判を今は、私だけにとどめたい気持である。

同志達の革命的自己批判の現われとしての革命的実践を期待する。私は出来うる限り⑬○○○文章活動を行ない、研鑽し、階級裁判を待つ積りである。

最後に赤軍派内に於ける私の処遇は諸同志の決定に一切ゆだねることを十分了承する。私は同志達の同盟に於いて、如何なる制裁をうけようとも、前段階蜂起—世界革命戦争に向け、○○で闘い抜く決意である。

即ち私の「自己批判↓党内闘争↓党派闘争に併存される政治組織解体の危機及び直接的別党路線の併存させるBの歪曲された排外主義的団結↓心情赤軍派の結集の遮断↓党派闘争の道の閉鎖の危険性をも拒否したのであった。

又、このように落ち着くことも確かに○○○は大きな比重を占めつつも不可避に第9回大会に集約されていく性格のものであった。

B内部に形成されている中央派スターリニスト的○○—○○○（下から派）そしてなお尨大に残存し形成されつつある「心情赤軍派」の層の三つの抗争は予測される第9回党大会に向け増々拡大されてゆくであろう。そして統一党大会に終るか（統一大会で分裂或いは分裂しなくても実質的解体かは別にしても）或いはそれ以前に分裂状況の深化と別の党大会も考えられるだろう。

いずれにしても、この過程に、我々赤軍派が正しく介入し、「心情赤軍派」「組織問題でひっかかっている」を結集し中央派を解体し全ゆる同志を結集することが必要であること。この活動を媒介するなかでの別党コースが形成されることが必要であるのであり、決して、これを離れては有り得なく前もって完全に別党で外から外的に介入することは誤りである。

以上からして、第一に「分派」＝「別党」体制を崩さず堅持し、にも拘らず、現在ストレートに別党旗上げを公然化することは戦術的には厳に慎しむこと。機関紙—別党宣言はやめること。今公然化する必要は更にない。今、我々の「手足を縛る」必要は全くない。

第二に全同盟に我々の「の主張」かつ7／6を前後する具体的経過が明らかにされておらず「デマ」と「中傷」或いは誤解に満ちており、我々「赤軍派」が闇から闇に葬りさられる危険性に対して早急に宣伝戦を開始すること（本―パンフレット類）

第三、我々が、同盟に正当な扱いを受けることにおいて自己批判をより完全なものとして対応する用意があることを公表すること。その条件を明示すること。

基本点

1、我々の総括と自己批判

2、PBの自己批判と総括

3、相互批判の形式と内実、議論技術等々。

第四、かかる態度を間接に4CCで表明すること直接は恐らく無理で正しくはないだろう。

以上である。

我々は○○○自己批判活動を続行し、理論―文章活動をできる限り遂行したい。

その内容は

第一、現代資本主義論を踏えた上での過渡期世界論の一層の深化

第二、攻撃型革命論のそれ

第三、共産同の第七―第八回―現在に至る理論―政治―組織活動の総括と我々の任務である。

以上